

玄証本図像再考

古川攝一（大和文華館）

玄証（一一四六～一二二二）は、平安時代末から鎌倉時代初期に活躍した僧侶であり、図像家として知られる。高野山大伝法堂を建立した覚鑿の弟子である証印に師事し、月上院に拠点を置いて活動した。数多くの白描図像を収集し研究を行い、自らも積極的に図像を転写したことが知られる。玄証に関わる白描図像は「玄証本」と称され、今日まで伝えられてきた。図像の多くは勧修寺を經由して高山寺に納められ、現在は諸家に分蔵されている。これらの図像には、玄証の落款や花押、「玄証本」あるいは「月上院」という裏書が認められる。

玄証及び玄証本図像については、戦前から研究がなされてきた。玄証の法脈や経歴については先学によって詳細に説かれているが、図像そのものについては未だ考察の余地がある。すなわち、玄証本図像に見られる表現の振幅をどのように捉えるかという問題である。自筆本と収集本の違い、さらには後世、玄証本図像を転写した作例も認められる。玄証は二十代後半から図像の収集をしており、その図像に見られる描線は多様である。また収集された図像は古様なものから唐本まで様々であり、図像の成立と転写年代は全く別の問題として検討せねばならない。本発表では、個々の作例の検討を通じて、複雑な玄証本図像の整理を行うことを目的とする。ひいては、他の白描図像とは異なる「玄証本」の特色についても検討を加えたい。

先学によって自筆本と理解されている作品には次の四点が挙げられる。「曼荼羅集」（大東急記念文庫蔵／奥書（以下、同じ）：承安三年五月十一日書写比較了 玄証）、「十六善神図像」（東京国立博物館蔵／治承三年己亥正月十八日模之了 玄証）、「梵天火羅九曜図」（高山寺蔵／文治五年八月廿一日 以別所御本書写了 玄証本）、「先徳図像」（東京国立博物館蔵／以勧修寺大納言阿闍梨房御本書写比較了 玄証）であり、書写年代及び「書写」「模」などの記述がある。これらの奥書が重視され、四点の図像は玄証自筆との見解で概ね一致している。一方、玄証自筆の図像から判断される描線の特色が、曲線の場合、初発の縦の打ち込みを強く入れ、そのまま横へ張りのある線で引ききり、縦の線では、打ち込み線を入れる際に筆の先端を感じられる程、先端が鋭く長めにとがる点を指摘し、描線の質が異なることを根拠に「梵天火羅九曜図」と「先徳図像」のみを自筆本と見なす見解も認められる。また、図像の分析だけではなく、玄証が用いた花押に着目し、その変遷から収集年代を考察した研究も行われている。

こうした先行研究をふまえ、本発表では、まず基準とされる上記四作品を分析し、玄証自筆図像の現状と問題点を確認する。さらに他の玄証本図像に考察の対象を広げ、図像、描線、裏書の分析を通して、玄証本図像の整理を試みる。玄証本図像には謹直な描線で尊像を丁寧に描出するものと、軽快な筆致を用いて尊像を描き出すものに大別でき、分析の基準となる。従来と言及よりも自筆本の幅を広げて検討材料を増やすと共に、基準となる同時代の白描図像との比較から、絵仏師を積極的に関与させた、玄証本図像の集積過程とその特色を明らかにしたい。